

Futa Space



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

Palette Enterprise.

目次

04-07 p : MPO

08-09 p : acami

10-11 p : Jucky

12-13 p ; 日月ねこ

14-15 p : 冬扇

16-17 p : 空見洋介

18-21 p : 辻武司

22-23 p : 無望菜志

24 p : 浄藍

26 p : 後書き

文章 : 全て高橋良喜

表紙 : MPO

「やあつ、てやあつ！」

一人の少女が触手うごめく肉室と化した廃ビルの一室で必死に奮闘を続けていた。少女の身体はエナメル質にてクルフィットしたボディースーツに包まれ、件を握る細い手指までが覆い隠されている。

上京は決して芳しいとは言えなかった。戦いを開始してから数十分、切つても切つても減らない肉触手の群れに少女の方が疲労を覚え始める。

「くそ……どうしたらいいの……」

シヨートカットにまとめた髪の間から一筋汗が垂れ落ちる。それが、目に入ってしまった。

「!!」

その一瞬が命取りであった。一匹の小さな触手が彼女の股間にとりついたのである。

「!こ、この……!」

剣で切り落とそうとする前に排泄用のスリットの中に潜り込んでしまう。気持ち悪い、という感触が起る前に腰に熱い感触が弾けた。

「はあうっ!? な、なに……腰が、腰があああああうっ」

まだぴちりと閉じたままの淫裂の上、鞘に守られて貝のごとく堅く閉じこもっているクリトリスに触手は向かい、急速に融合を始めたのだ。

「あああああうっ腰、腰が熱くて……何、何か生えて……生えてくるうっ」

クリトリスに寄生した触手はメキメキと大きくなり、やがて

ズルンっと言う音を立てながらスーツの隙間から飛び出してくる。そこにあつたのは成人男性がたじろぐほどの巨大なペニスであった。

「う……うそ……私……おちんちん……はやされちゃった……!? あ、あふううっ!?」

クリトリスと直結したペニスは驚くほど敏感で、ビルの中を駆け抜ける生ぬるいすきま風に当たっただけでもびくつと震えて心地よい感触を与えてくる。すべすべした質感のスーツにこそれると腰の奥からジーンとした熱く切ないわだかまりのような物が貯まっていくのを感じた。

「ああ……いや……こんなおちんちんいやあ……」

さりとて自分の一部になってしまったペニスを切り落とせばどういうことになるかわからない。対処することも出来ずに身をよじるたびに長大なペニスは右へ左へとゆれ、そのたびにエナメル質なスーツに根元を擦られビクンビクンと先走り液をほとばしらせながらしゃくり帰ってしまう。

全身の感度も上がってしまったようで、ボディースーツの胸の部分にはかわいらしい乳首が二つしつとり濡れたスーツに吸い付いてその姿を透けさせていた。乳輪どころか乳腺の膨らみまでわかる勃起具合だ。

乳首とふたなりペニスと同時に風に吹かれるとびくびくつと全身がのけぞりかえって背筋に厚い感触が走った。腰ならず秘唇にもムズムズした感触が走り、割れ目が深くスーツに刻み込まれていく。かすかな刺激にも過敏に反応する異形の器官を生やされた戦闘少女は最大の危機を迎えていた。



「いやっつつつ、あ、あおおおつつつ、あうんんつつつ!!」

黒衣のスーツに包まれた戦闘少女は切なげなあえぎ声を上げていた。それもそのはず、長大なペニスにオナホール状の触手が絡みつき、キュウキュウと締め付けているのだ筒状の触手の中には無数の粒や繊毛が生え備わっており、少女の出来たばかりの敏感ふたなりペニスを縦横無尽に責め立てていた。

時にはゴリユゴリユと上下にピストン運動を繰り返してふたなりチンポを責め立てる。そのたびにとろけるような熱い愉悅感が腰の中で炸裂し、脳天まで一直線に稲妻のように駆け上っていく。ペニスのカリがぶわつと拡がり、幹に血管走つてのけぞり帰る。そのたびに元々キツキツなオナホールに幹が更に密着し、粒や繊毛の味を嫌と言うほど味合わされてしまう。

「いやああああ……こんなのでっ……こんなので感じたく……ないっ……んああああああおおおおおつつつつ」

しかし戦闘少女の思いとは裏腹にふたなりペニスから駆け上ってくる快樂はとてもでは無いが耐えられるような、物ではなかった。

じゅぶつ。ぬぶぶぶぶうつつ、ぐぢゅつつつという卑猥な音を立てながら媚薬効果のある粘液ローションをたつぷりとまぶしながら締め付けつつ上下運動を繰り返されると腰が抜けてしまいそうなほどに気持ちよい。もう立っておいることも出来ず床にへたり込んでいる始末だ。更にクリペニスを喜ばせ用途ばかりに触手オナホールは猛烈な歓待を繰り広げる。奥からずちゅうううううつつと吸い上げるようにバキュームを繰り出したのである。

「あひつつつつ!! ひああううううつつつつ!!」
ふああああああお!!!

根元から引きちぎられそうなほどの強烈なバキュームと締め付けを受けてペニスに痺れるような快感がほとばしった。電流のようにほとばしった快感は腰に津に刺さり次いで脳天を直撃する。つぶつぶが剛直の幹にこりつと触れるたびに目の目前に極彩色の花火が上がる。もう戦闘少女の非才列の完全にぬかるみきつてぱっくりとその口を開けていた。触手は情け容赦なく濡れた膣口の中へと潜り込んでいく。

「ひああああああああ!!! 中と外一緒になんて……!!」

腰の中で産まれた新たな快感が少女を悩乱させる。黒髪のシヨートカットを振り乱すたびに辺りにほの香る甘酸っぱい発情汗と随喜の涙、そしてよだれが振りまかれていく。

膣内に入った触手はしばらくして子宮口に到達するGスポット付近をまんべんなく搔き擦り、子宮口をゴンゴンとき強烈にノックする。それに合わせるようにして触手オナホも締め付けと上下運動を寄り激しくした。

「だめえええええええ……つつつつつつ!!! 腰あちゆくて、なにか、なにかはじかひゃうううっ! おっ、おっ、おおおおおつつつつ!!!」

どびゅつつつ!!! びゆるるるるるる!

ペニスの先端から靈力を変換された濃厚な白濁汁がはなたれ、触手にバキュームされていった。股間からも愛液を激しく噴出させ、絶頂に達した戦闘少女。だが、ふたなりペニスの真の快樂を味わうのはこれからであった――。



「憐っつ！ 憐！ しっかりして！」

身体をピッチリと覆うスーツに身をまとった女性の姿は明らかに異様であった

豊満な乳房はいつも一回り以上もサイズアップして満々と弾けそうなほどに膨れあがっている。そしてくびれた腰の下。プロテクターに覆われていたはずの股間は破壊され、異形のふたなりペニスがそり立っていたのである。

「凛……私……もうダメ……おちんちん熱くてたまらないの……はあ……このままじゃ弾けちゃう……お願い……あなたの中に入れさせて……」

「れ、憐、何を言っているの、正気に戻って！」

凛が必死に叫ぶが連は完全に常軌を逸しているようであった。背中から寄生されたのであろう触手を伸ばし、凛の身体を感からめとっていく。

「あっつ……やめて、憐！」

パートナーに手荒なことも出来ずなすがままに触手に絡め取られてしまう。そして座位に持ち込まれたかと思うと、まだ濡れてもいない凛の淫裂をタイト越しに貫いたのである。

めりめりめりめりつつつ……ずぬぶううつつつ！！
「ひつつつつつ……ひああああああおおおお！！」

触手ペニスから分泌されていた先走り液のおかげで強烈な痛みこそ感じなかった物の、布ごとの挿入に凛は驚きを隠せなかった。そして布越しにじんわりしみこんだ粘液は少女の粘膜にしみこんで身体を徐々に熱く火照らせていく。肉襞がざわめき始め、異形の侵入者を布越しに歓待しようとキスの嵐を繰り

出し始める。それに合わせるように連は腰をうねらせ始めた。下に腰を使って凛の体をずんずんと力強く突き上げていく。

「やめつ、やめて憐……ふああああ……んんんつつ、お、おふああおおおおつつ」

媚薬効果を持った粘液がしみこんだ膈壁はいぼや溝で肉襞を布越しに痛烈に抉られるたびに腰が痺れるような快感美を与えてくる。悦楽の奔流が膈内で渦巻き子宮をどろどろの溶鉱炉のように熱く煮溶かしていく。

異形のふたなりペニスはその入り口にも何度も何度もノックを繰り返した。ずんずんつと強く腰を抉られ身体を上下に揺さぶられるたびに股間から脳天まで突き刺さる様な悦感波動が身体の芯を貫いていく。やがて媚薬粘液にまみれたふたなりペニスは子宮口をにめり込み、子宮頸管をも貫通して子宮内部に潜り込んできた。

「ひあ……！！ おおつ……おおおうううつつ……！！」

ピッチリしたタイトに包まれた下腹部がふたなりペニスの形にボコツと膨れあがった。そのまま子宮内壁をズンズンと突き上げると

凛の感極まった艶めいた叫び声が辺りに響き渡る。そして憐のふたなりペニスから熱い灼熱のマグマが打ち込まれた。びゆるるるるるるつつつ……！！

「あつううううつつつ……！！」

しかしそれでも憐は腰を使うのをやめない。ふたなりペニスは、霊力が尽き果てるまで萎え果てる事は無いのだ。二人の異常な交わりはそれから一昼夜以上続くことになる――。



「んんひつつつ!!! ひあおおうううつつつ!!! んんん
んああああああ!!!」

辺り一面が触手に囲まれた部屋で、一人の少女修道士が肉
の中に埋め込まれていた。少女はとても修道女とは思えぬレ
オタード状のスーツに身をまとい足下には彼女が使っていた
のであるう十字架型をもしたメイスが転がっていた。魔を打
つ戦闘修道女。それが彼女の正体であった。しかしその任務
は危険と裏合わせである。一度魔の物に敗北すれば徹底的な
陵辱が待ち受けるのみである。まだ幼い彼女にもその洗礼は
容赦なく訪れた。まだ膨らみかけの胸は興奮のあまりに目一
杯に膨らみ、その頂点では破裂しそうなほど乳首がびんびん
にそそり立っている。下腹部に目線に移せば、股間からは幼
い体軀からは、想像もつかない巨大なふたなりペニスが生え
伸びていた。レオタードの縫い目の部分を破って飛び出た逸
物はバキバキに勃起しきり、彼女が身もたえするたびにぶる
んぶるん上下左右に振るえる。そのペニスめがけて、口状の
触手が忍び寄り、パクリと半ばほどまでを包み込んでしまっ
た。

「んつつひいいいいあああああおおおおおつつつつ!!」
クリトリスを魔の力でペニスに改造された逸物は敏感すぎ
るほど敏感だった。ぬるぬるキツキツの触手管の中で強烈に
ずちゆるるるると吸い上げられ、更に甘噛みまでされて
はいかに戦闘修道少女といえども道の快楽に耐えるすべを知
らなかつた。

ふたなりペニスが炸裂しそうなほどの快楽がペニスの中

に渦巻き。あつけなくどぴゅどぴゅと射精を繰り返してしまふ。
その度に少女の霊力は失われ魔物の活動は更に活気づく。触手
管の中に更に数本の触手が生え伸び、ぬす塗ると締め上げるよ
うに擦り上げていく。

「ら、らつめえ、まだ、また出る……つつ!! おおおおお!!!」
あつけなく何十度目化の射精に導かれてしまふふたなり修道
女だ。

「か、かみよおおおおつつ……ふああああ……ごつつ、
御慈悲を……お、おすくいくださつつ……ひにやあ
あああああ!!!」

祈りの言葉すら許されず触手はペニスを責め立てる。先端の
霊力をはき出す鈴口の部分に細い触手が一本入り込んだのであ
る。そしてぬつぷぬつぷと幹を擦り上げると同時に出し入れを
繰り返す。

「ひつつつつぎいいいいいい……ひぎぎぎぎつつ
……んあああああおおお……私のクリペニ……破裂す
るうつつ……ダメ、出せないのダメええええつつ」

尿道に当たる部分に触手が入り込んでいたために射精が出来
ない。今まで好き放題に射精の快楽を味合わされていただけに
いきなり寸止めを喰らわされるとその焦燥感尋常では無かつ
た。鼻水をたらし、よだれをこぼして顔をぐしゃぐしゃにする
まで戦闘修道女をもてあそんでからようやく射精を許可する。
一時的な開放感と悦楽に身を震わせる修道女であった。しかし
これはほんの手始めに過ぎない。まだまだ魔のペニスによる洗
礼は始まったばかりなのだ――。





ぱん！パンパンパン！

シスターの両手に握られた二丁の拳銃が狙い違わずに悪魔触手をはじき飛ばした。

「覚悟なさい！ 神の裁きを今受けるのですー！」

そう叫びながら突進したシスターはぼろきれをかぶった悪魔修道士に向かって拳銃を乱射した。しかし、魔の使徒はそれを交わそうともせず触手ではじき飛ばしてしまう。

「くっ、聖印を刻んだ銃弾でも効き目が無いというの……!?」

聖なるシスター少女の顔に焦りの色が浮かんだ。対して悪魔修道士の方は余裕綽々だ。

「貴様の使える髪と呼ぶ者の加護など所詮そんな物よ……さあうけるがいい、わが魔の洗礼を！」

そう叫ぶと悪魔修道士は両腕を突き出した。目には見えない波動が生まれ、衝撃波が二丁拳銃の少女をはじき飛ばす。

「きゃあっっっ!!!」

戦闘修道服の一部が破れ形よい乳房がまるびでてしまった。そのまま魔教会の地面にたたきつけられる。

「ぐっっっっ!!! う……う……」

「さあ見てみたまえ生まれ変わった自分の身体を！ 我が淫なる神の与えたもうた肉体を」

最初に感じたのは股間の違和感だった。戦闘修道服を慌ててめくってみると、なんとそこには男性のペニスが生えているでは無いか。

「な、何をしたのです！ こんな汚らわしい物を……！」
「女性の身で男性の悦楽も得られる身体になったのだ。すばら

しいとは思わないかね？ さあ、味わってみたまえ至上の悦楽を」

そう言うのと触手がそり立ったチンポめがけて這い寄ってくるでは無いか。思わず後ずさりして逃れようとするが触手が拳銃をつかんだままの両腕を縛り上げて身動きを封じてしまう。

イソギンチャクのような触手が股間にたどり着き、細い触手でペニスを巻締め上げた。

「んひっっっ!! んはあああああっっつ、あひい!」

身体がぞくぞくと震えるのを感じた。今までに味わったことの無い明らかに異質な感触に二丁拳銃の修道少女はおびえを覚えた。それが決して不愉快な物では無く、むしろ快美な方向に作用しているのも恐ろしかった。腰がとろけそうなほどの悦感が走り抜けペニスをビクンビクンと震わせて先走り汁を放つてしまう。

「こんなっつ……こんな事では神も私も屈しませんっ……んひっっっ!!!」

触手は問答無用とばかりに敏感ペニスの幹を這いずり回った。

「はあおつ、で、出る、なにかでましゅうつうつうっつ!!」
どびゅっつどぶるるるるっ!!!

勢いよく鈴口から白濁液が吹き上がった電撃のような快感美が腰に走り、そして走り去っていくような法悦感。

「ああ……神よ……お救いください……お助けください……!!」
だが彼女が信じる神は無慈悲で、悪魔のような悦楽を更に味合わせられるのだ――。



「滅しなさい邪なる物よ!」

巫女の手から数枚の御札が放たれた。紙切れは光の矢となつて触手どもを引きちぎる。

発端はとある旧村を通る道路工事であつた。そこに祀られていたほこらを工事関係者が無思慮にも破壊してしまつたのである。そのほこらは古代の昔に暴れた淫神を封じ奉つていた物だつたのだ。工事関係者が原因不明の連続射精や、女性工事関係者は陵辱を受けるなどの怪異が頻発した。そのほこらを修復し、再び淫神を沈めるため神社庁から派遣された巫女が彼女であつた。

「祓いたまえ清めたまえ……!!」

触手の動きが弱まつたのを見計らつて術式に則つて封印の祝詞を唱える巫女。しかしその瞬間動きを止めたのが彼女に致命的な隙を作つた。触手が悪意ある物と戦うため動きやすく改造された巫女装束の直垂をめぐりあげ、股間にとりついたので。

みるみるうちに股間にとりついた触手はクリトリスに忍び寄つていき、ついに融合を果たしてしまふ。あつという間にそこには巨大なふたなりペニスが出現することになつてしまつた。

「これほどまでに巨大な邪気が……!! 取り除かないと……!! ふたなりペニスに御札を貼り付けようとした手に触手が巻き付き、それを封じられてしまふ。その代わりとばかりに手のひら状の触手が長大なペニスをぎゅつと握つた。

「はうあおつつつつつつ!!!」

思わずのけぞり返つてあえぎ声を上げる巫女だ。触れられた

触手の手は灼熱の棒のように熱かつた。最初は冷え切つていた肉棒にも熱が移り、全身にふつふつと玉のような汗が浮かび始める。手のひら触手はその反応に気をよくしたかのようにガツシュガツシュと力強く男性がセンズリをするように強くしごき立てててきた。

「ああああつつ?! だめ、だめです、そんなに強くしごいては……!! はああああああああ!!!」

巫女は背骨も折れよとばかりにのけぞり返つてあえぎ声を叫んだ。肉棒から爆発的な快感がわき起こり、腰に向かつて流れ込んでくる。それにあらがうすべなど無かつた。あつという間に女性の部分もぬかるみ始め、割れ目がぱっくりと花開く。大陰唇はおろか小陰唇までタイツ越しに見えている始末だつた。そこめがけて一本の触手が布を引き裂く勢いで一気に突き入ってくる。びりりつつ! じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ!!

「はああああああああ——おとおおとおおおおつ」
すでに受け入れ準備を完全に終えていた膣壁を思いっきり掻き擦られ、巫女はもんどり打つて快感に身もだえた。そして膣内に入った触手は間を置かずに射精を開始した。

どぶどぶぶつと言う熱いマグマが子宮に流れ込んでくる悦楽の衝撃にペニスが耐えられるわけも無く、連動するかのよう射精を繰り返した。

「いやあ出るうつつ、出されてるうううう、ど、どっちも……はああおとおおとおおおおおつつつつ!!」

敗残の巫女は相反する感触にさいなまれながら淫獄へ落ちていった——。



どんな凄腕の退魔師でも上級の淫魔と対峙するときには常にその肉体を陵辱にさらされる覚悟をしていなければならぬ。今の彼女がまさにそうだった。激闘の末あと一歩というところまで追い詰めたのだが一瞬の隙から逆撃を被り、いまや股間に立派な逸物を生やして霊力を搾り取られんとしていた。無数の触手が美女退魔師の体中をうねり回り、スレンダーボディをなで回す。逸物には一本の触手がとぐろのように絡みつき、粘液と共にしごきたて射精を促していた。

「く……！」

しかし彼女ぐらいの上級退魔師になると霊力のコントロールが出来するため簡単に射精することは無い。それにいらだつたかのようにペニスに巻き付いた触手はよりいっそう強くガツシュガツシュと強く擦り立てた

「あうっつ……うう、うう、……き、きついいいいっ」

いくら霊気の流れがコントロールできるからといって快感までコントロールできるわけではない。敏感勃起をしごかれる度にお腹の奥でじんとした熱い快感がわき起こり、子宮がズクンズクンとわずくのを感じる。肉襞はざわざわとざわめき異物を受け入れたがっている。だがそこに素直に挿入してやるほど触手は優しくは無かった。彼女のバトルグローブに包まれた両指に粘液をすり込み始めたのである。

「あ、あひっつっ!？」

さしもの退魔師もこれには驚いた。戦うための両指が触手に絡みつかれ、勃起と同じ感度になるまで媚薬を塗りたくられていたのである。さらに指ををじゅりゅつ、じゅりよつと濡れた

手袋越しにこすられると十本のペニスを擦られているかのような快感が襲いかかってくる。粘液は本体であるペニスにも塗りまぶされた。じゅりゅつ。ぬるりゅうつ……。

「はああああああおとおおおおっつ!!」

指の快感に倍する悦感がペニスから押しよせ腰を熱くところかせていく。ペニスを擦ると同時に指を擦られ、複雑した複雑な快楽が腰の中で渦巻いて快感電流となってペニスと指から稲妻のように脳天に突き刺さる。メガネの裏の目の前で極彩色の花火が何度も何度も打ち上がった。

それでもまだ射精しないのは流石は訓練された上級退魔師というところであった。ならばとばかりに触手は豊満な乳房を揉みたててくる。更に身体のおちこち、へそや脇腹にまでもが粘液をまとった触手に絡みつかれ、性感帯に変貌させられていく。各所を同時に責められると

「くあああああああつっつっつっつっつっつっつ!!!」

流石の上級退魔師の美貌にも悦楽の表情が走った。随喜の涙をにじませ、口の端からはよだれをたらしている。ペニスからはとうとう先走りの粘つく液が分泌絵を始め、糸を引いてたれ落ち始めていく。それを逸物にまぶすかのように触手がぬりゅんぬりゅんとしごき上げる。

「くほおおおつっつ!!! こ、こんな程度で、私は……ふあわああああおつっつ」

口では強がつている物の先走り液がびゅつと飛び散り、ペニスはしゃくれ上がって放出を要求していた。そしてそれに答えるべく触手が蠢く。





セーラー服にホットパンツ、タイツにグローブそしてブーツ
とといった一風かわった出で立ちのまだ幼げな少女剣士が日本
刀を振るいながら異形の物と対峙していた。

彼女の商売は始末屋。依頼されれば人から物、異形まで何で
も始末する闇の住人だ。少女の身でそんな職業についているだ
けあって腕は立つ。しかしその分恨みも買いやすかった。

(くそっ強すぎる……はめられたか……!?)

今始末しようとしているのは明らかに始末屋少女より格上の
異形だ。グローブの中で汗がにじむ。数度の剣劇の末、つい
に決着はついた。始末屋少女の日本刀が天高くはね飛ばされた
のである。

「くっ……殺せ……」

しかし異形の物が取った行動は少女をくびり殺すことでは無
かった。股間を守るホットパンツをズリおろし、濡れてもいな
い割れ目の上に鎮座するクリトリスの鞘を剥いて密着させた。

「う、熱っ!」

するとクリトリスの快感神経がむき出しになり、触手と融合
して行くでは無いか。十分に結合したところを見計らって触手
が切り離された。

「なんだ……これ……」

そこにあつたのはは成人男性大ぐらいのペニスであった。ぎ
んぎんに勃起したふたなりペニスはホットパンツの裂け目から
天を仰いでそそり立っている。グローブに包まれた手で握って
みるが、ただひたすらに熱く火照っており、灼熱の棒を思わせ
たそしてエナメル質な手袋が擦れる感触でつんひつと鼻にか

かったようなあえぎ声を上げてしまう。そして触手はその下で
まだキツく濡れてもいない割れ目に過ぎない淫裂に無理矢理入
り込んできた。触手の先端は電極状にとがっており、その異常
さを際立たせている。

みきみきみきみきつつ、めりつつつつ!!!

「んはああああおとおおおおつつつつ!!!」

身体を裂くような痛みは一瞬。すぐに媚薬効果のある触手の
粘液で膣内は熱く火照りだし愛液が分泌されて中がこなれてく
る。それを見計らったかのように、触手はなかで電撃をスパ
ークさせたのである。

ヴァリバチチチチチチチチツツツ!!!

「ひあ!!! はおおおおおおおおおおおおおおおつつつつ!!!」

突然の強烈な刺激に身体がびくんとはねた。そして逸物から
天高く白濁液がどびゆりゆつとはなたれる。電撃の衝撃で子宮
が痺れ。クリペニスも甘い電撃にさらされて思わず射精してし
まったのである。ブーツに包まれた足をつっぱらかせ、グロー
ブをはめた手がグーパーを繰り返す。

更に電撃は二度三度と始末屋少女の膣内を撃った。ヴァチ
ヴァチヴァチ、ビリビリビリツツツ!!!

「はああおおおおおつつつつ!!! おおつつおおうつつつつ!!!」

そのたびに逸物から霊力が変換された白濁液が天高く飛び上
がっていく。目を見開いてがくがく震えながらその光景を見つ
めていることしか出来ない始末屋少女。快樂の電撃は彼女が枯
れ果てるまで降り注ぎ続け、ようやく終わったときには霊力を
使い果たしたただの少女と成り果てていた――。





Futa Space

Creator

● Writer

高橋良喜

● Illustrator(敬称略)

MPO

acami

Jucky

浄藍

空見洋介

辻武司

冬扇

無望菜志

日月ねこ

●発行所

Palette Enterprise

HP <http://www.palette-e.com/>

E-Mail anq@palette-e.com

●印刷所

サンダグループ

2014年10月05日：第一版

ふたけつと 10.5

For Writer

●高橋良喜

というわけで今回はふたなり特集本でした。挿入少なめ、ふたどぴゅ多めでお送りしましたが今回ふたケットに合わせた本だからですね。

お好きな方には溜まらないように掻いてみたつもりなんですけど如何だったでしょうか？私自身あまりふたなり物を掻かないので不安な面も多いのですがイラストに助けられて何とか見られる物になってるんじゃないかなと、おもいます。

受容があるようならまたやってみたいですね。案外楽しかったです。

ではまた次回！

- ・ 本書は18歳未満の方の閲覧をお断りしております。
- ・ 本書の内容はあらゆる犯罪行為を肯定、助長するものではありません。本書に記されている内容を実行した場合、犯罪行為となる恐れがあります。
- ・ 本書の内容に関する権利は全て PaletteEnterprise が有しています。無許可での再配布（ネット上へのアップロード、対価を伴わない共有行為、交換行為を含みます）を禁じます。また、著作権法に定められた例外以外での複製は禁じます。該当事実を確認した場合、刑事法的処罰の請求、民事法的損害賠償の請求を行う可能性があります。
- ・ 落丁、乱丁については当サークルに在庫がある限り対応致しますが、在庫切れの際にはご容赦下さい。